

【司会：喜多村】

飯吉先生とは、どうして知り合ったかということから申し上げますと、私学高等教育研究所にあるときメールをいただきまして、そこでこういう方がいらっしゃるということを知ったわけでありまして。私どもが、昨年、カリフォルニアに参りましたときに、スタンフォードのすぐ近くに研究所がありまして、そこでお目にかかって、我々にいろいろカーネギー財団の活動に関して教えていただきました。それから、既にお配りしてあるかと思いますが、いろいろ論説や、特に、最新のアメリカの高等教育に関する情報についてご寄稿もいただきました。飯吉先生は、国際基督教大学をご卒業になって、そこで修士課程を終えられまして、フロリダ州立大学でPH.Dを取得、教授システム学を専門にしておられます。ICU、フロリダ州立大学、ジョージア大学の学習行動研究所に勤務されまして、現在、カーネギー財団の上級研究員、知識メディア研究所のディレクターでいらっしゃいます。ご著書としては、『マルチメディアデザイン論』、『電腦への提言』をアスキーから出されてますし、それから教育とテクノロジーに関する論文も多数ご発表になっております。単にテクノロジーに関するテーマだけでなく、フィロソフィーや高等教育の本質論を踏まえたメディア論を展開しておられますし、今日のアルトバック先生とのお話とも重なるところがあるとも思います。それではよろしく申し上げます。

【飯吉】

今日は、テクノロジーがもたらした高等教育における新たな動き、特にアメリカでの動きを中心にお話したいと思います。今後日本の高等教育界で、今日お話しするような展開があるかどうか、また日本の高等教育界がこれらアメリカでの動向に追従していくのかどうか、まだ私にはわかりません。しかしながら、近年高等教育の国際化が進む中で、このような動きには鋭敏であるべきだと考えますので、その意味で、今回このような話をする機会をいただけたことをとても嬉しく思っております。

プレゼンテーションの概要ですが、まず「Five-minute University」という短いビデオに続いて、アメリカの高等教育界で、「Opensource movement」と一般的に呼ばれている動きについてお話しします。次に、私の勤め先であるカーネギー財団の事業や研究活動の概略について、特に私たちが力を入れている「Scholarship of Teaching」の推進を中心にご説明します。また、テクノロジーを利用して、この「Scholarship of Teaching」をどのように支援していくかということが、私の研究所で取り組んでいる主要な研究開発テーマですので、これについても関連するアメリカ国内の主要なプロジェクトと共にご紹介します。最後に、こららのプロジェクトと「Opensource movement」というものがどのように結び付き合っているのか、また現在アメリカで広がりつつある動きが、今後のアメリカの高等教育、ひいては世界の高等教育を変えていく力になる可能性があるという点にも触れたいと思います。

私がアメリカに渡ってから学んだことの一つは、効果的なプレゼンテーションには、インパクトとユーモアが大事だということです。これからお見せするのは、3分ほどの英語のコメディショーの一部で、「Five-minute university」（「5分間大学」）というタイトルがつけられています。この「5分間大学」というのは、このコメディアンが創作なのですが、「大学の平均的な卒業生が、卒業してから5年後にまだ覚えていることだけを、5分間で教える効果的な大学」というアイデアに基づいており、学費は僅か20ドルで学位も授与されます。話の中では、語学、経済、ビジネス、宗教学など様々な学科について、いかに5分間で簡潔に「大学卒レベル」の知識を身に付けさせられるかということが、形骸化

した大学教育を皮肉りながら、ユーモアたっぷりに語られます（「Five-minute university」の上映）。

この大変示唆に富む「5分間大学」は、私たちに少なくとも3つのことを考えさせます。まず、質の高い「教え」とは何か。次に、学生が社会に出てからも長期に渡って役に立つような大学における「学習経験」とは何か。そして最後に、日本での国公立大学の法人化構想とそれに伴う独立経営の問題にも関連しますが、今後多くの大学にとって一層重要となる教育サービスの充実と「Cost-effectiveness」（対費用効果）にどのように取り組むべきか。このどれもが、特に教育サービスを提供する機関としての大学にとって、真摯に取り組むべき重要課題ではありますが、その取り組み方には、様々な方法があります。その中で、今日は特に、Open source と Scholarship of teaching and learning という考え方が、これらの課題への取り組みに際してどのように役立つかという点をお話しできればと思います。

現在アメリカでは、複数の大学や短大が連合し、集团的・協同的に、いわば共同体として教育と学習のクオリティをあげようとする動きが広がっています。さらに、テクノロジー、特にインターネットに代表されるようなネットワークテクノロジーやマルチメディアなどが、このような試みを推進するのに利用されています。ご存知のように、アメリカの高等教育では現在、80%以上の大学や短大が、何らかのかたちでオンライン教育、オンライン講義を取り入れています。MITのOpen Course Ware Projectでは、現学長の号令の下に、今後5年間で、約2,000の講義をオンライン化しようと計画しています。さらにMITは、「これらのオンライン化された教材を、世界に向けて無料で公開する」という衝撃的な発表を行いました。その発表のあった日、私はカーネギー財団のラウンジで同僚と話していましたが、ほとんど半日近くは、その話で持ちきりだったことを覚えています。この試みの狙いや目的は何なのか、これは他の大学にどのような影響を与えるのか。各メディアはこのプロジェクトについて大きく報じましたし、実にアメリカの高等教育を揺るがせた一日でした。さらに、ショッキングだったのは、そのプロジェクト費用です。当初MITは、5年間で、1億ドル、日本円にして120億円で使われるだろうと試算したの

ですが、とりあえず、メロン財団、ヒューレット財団が、それぞれ 13 億円程度、MIT が自ら 3 億円くらい供出し、とりあえず、手持ち資金 30 億円くらいで、プロジェクトが開始されています。世界中の大学が、Open Course Ware Project のウェブサイトアクセスし始めているのですが、この間、MIT の関係者と話をしていたら、なぜかベトナムからのアクセスが多い、ということでした。ベトナムは、さっきアルトバック先生もおっしゃいましたが、元社会主義国であるということから共有の思想に共鳴しているのかという気もしますが、MIT の関係者も不思議がっていました。

Multimedia Educational Resource for Learning and Online Teaching、メルロー (MERLOT) というプロジェクトも注目を浴びています。MIT のプロジェクトが、単独の大学による試みであるのに対し、MERLOT は、複数の大学の協力によって成り立っており、それらの大学に属する数百人もの教員が、自分たちの作った教材を登録して、ダウンロードして自由に利用できるオンラインデータベース環境が構築されています。ビジネス、教育、人文、自然科学、工学など、様々な分野の教材が流通していますが、これらの教材は「そのままの形で」ただ利用されるだけではなく、実際に利用した教員からのフィードバックに基づいて改良が加えられることも想定されています。いかにその教材が役に立ったか、または役に立たなかったか、という経験や知識が蓄積されていく。さらに、「ある学問分野において人気のある教材ベスト 10」というような情報も提供されています。

最後に、お話ししたいのは、Open Knowledge Initiative。参考資料のほうにも私が書いたものがありますが、これも MIT によって行われているプロジェクトです。これまでにお話した二つのプロジェクトが、教材を公開にするという試みであるのに対し、この OKI は、その教材を利用するためのオンライン・プラットフォームを公開していこうというものです。現在のアメリカのオンライン教育は、非常におおまかに言ってしまうと、WebCT と Blackboard という二大ラーニング・マネージメント・システムを提供する企業があり、この両社がマーケットシェアのほとんどを独占しているという状況です。このような独占的なマーケット支配が行われる中、各大学は、オンライン教育が普及していくにつれて、これらの製品の使用料やサポート費用が、毎年急激に膨らんでいくという問題に頭を悩ま

せている。多くの大学が使うこのようなテクノロジーの開発や提供を、私企業にだけ任せておいていいのか、という話になり、テクノロジーの雄である MIT が、ならば私たちが一肌脱ごうということで、自前のラーニング・マネージメント・システムとスタンダードな規格を作り、それらを他の大学が自由に使えるように公開しよう、というプロジェクトを始めた。つまり、先の Open CourseWare と MERLOT という 2 つのプロジェクトが、『教育の中身』を公開して、みんなでそれを批判しあっていいものにしていこうという試みであるのに対し、この OKI のようなプロジェクトは、『教育の中身を入れる器』、テクニカルな器をオープンにしていく試みであると言えます。

先ほどアルトバック先生の話の中で、無名の大学をいかにして著名な大学が助けていけるかという話題がでましたが、私は、アメリカの高等教育専門紙「Chronicle of Higher Education」に、これらの MIT のプロジェクトに対するコメントを求められた際、OCW や OKI は、トップクラスの私立大学が、特に無名の大学ということではなく、いわば世界中の大学に、「Intellectual Philanthropy」（「知的な慈善」）として、自分たちの持っているものを公開しようとする素晴らしい例だ、と発言しました。また、「Public Goods」（「公共の善」）と、「Private Goods」（「私的な善」）の対比という点からも、本来は利益を追求をする事業体でもある私立大学が、このような形で「Public Goods」を提供し始めたのは、とても画期的なことと言えます。

次に、「Scholarship of Teaching and Learning 」について触れたいと思います。

「Scholarship of Teaching and Learning 」の解りやすい説明としては、カーネギー財団理事長の Lee Shulman の「私たち大学人は、常日頃、research においては、自らの研究成果を発表し、同僚と分かち合い、さらにその互いの研究の積み重ねという努力を当然の如く毎日行っているが、同じことが、teaching に関して行われているかと尋ねられると、みんな黙ってしまう」という言葉を引用するのが適当でしょう。教育機関としての大学は、研究と教育という 2 つのファンクションを備えています。共同で何かを生み出していたり、互いに助け合うということに関しては、常に研究の方が優先されます。さらに、大学が教員の業績評価を行う際も、研究の方に重きが置かれる。教育は、いつも 2 番手です。

日本だけの問題ではなくて、アメリカでも終身雇用権、テニユアという制度の中で、やはり、研究がどれだけできるか、どれだけ論文や本を書いたかという形での教員評価が伝統的に行われており、この教員が学生にどれだけ上手に教えられるかという能力については、残念ながら比較的軽んじられている。このような文化を変えようとする「Scholarship of Teaching and Learning」は、大きく分けて3つの考えからなっています。まず、「教え」というものを公開していく。さらに、それを、同僚の批判（「Peer Review」）などを通し、優れた点や改善できる点を評価する。この評価というのは、必ずしも定量的な評価、例えば5段階評価、である必要ありません。自分の講義やゼミの中で、「どうもこの部分では大半の学生の理解が悪いようだが、自分は何が原因なのかわからない、どうすればより良く教えられるのだろう」というような問題を分かち合い、同僚の教員から「こうすればいいのではないか、自分はこういう試みをしてみたらうまくいった」というようなコメントをもらったり、「自分も似たような問題を抱えているので、一緒に授業改善のプロジェクトをしよう」というような協力を行う。このような形でですね、例えば、「化学概論1」という講義を、世界中で何人の大学教員が教えているかということを見ると、これはすごい数になる。しかし、いかにこの「化学概論1」というものを効果的に教えられるかという「水平的」なコミュニケーションがまったくとられていないために、各地で個々の教員が「良く教える」ための独自の努力をしている訳です。これは、知的リソースの大きな無駄ではないか。また、そういう努力の記録が残されずに、その今日が引退した後に、次の世代の教員に引き継がれないということも問題と言えます。研究であれば、論文という形で知的な記録が蓄積され、受け継がれていくのに、教育に関しては、例えば、教え方の上手な教員の「教授法」が後世に伝えられていない。これだけ、メディアとかテクノロジーが発達しているのにも関わらず、この点でほとんど進歩がみられない、というのは非常にショッキングなことです。

このような背景を踏まえて、カーネギー財団の「Knowledge Media Lab」（以下、「知識メディア研究所」）では、大学や教員が、彼らの「教えの知識」を効果的に公開し、共有し、構築していくために、メディアやテクノロジーがどのように利用できるか、という研究と

開発を行っています。主要な研究テーマは、3つあります。まず、「その専門分野の知識を教えるために必要な教授法的知識」(「Petagogical Content Knowledge」)を、他の同僚と共有するために必要な表象モデル(例えば、マルチメディアやデジタルビデオをどのように効果的に利用できるか)が研究されています。また、日本でもアメリカでもテクノロジーは苦手だという大学教員は多いのですが、できるだけ多くの大学や大学教員に、教育を改善するために効果的にテクノロジーを利用してもらえるか、という課題にも取り組んでいます。さらに、これは私たちの夢とも言えますが、アメリカ国内にとどまらず、世界的な規模で、教えの知識の宝庫とも呼べるデータベースをオンライン上に構築し、多くの大学教員が、教授経験の深い浅いに関わらず、自分たちが教える中で、何か困ったことや、達成できたことがあった時には、そのオンライン知識ベースを通じて、自分の経験や知識を他の同僚教員と分かち合ったり学び合ったりすることができれば素晴らしい、と思います。

カーネギー財団が「Scholarship of Teaching and Learning」を推進するために行っている主要なプロジェクトの一つに、教員のための1年間の研究フェローシップ・プログラム、「Carnegie Academy for the Scholarship of teaching and Learning (CASTL)」があります。「CASTL」では、自分の教授法を改善したいと考えている教員たちを、毎年40人ほど公募し、夏期集中のワークショップなどを通して、彼らに教授法改善に関する様々な学びや知識・意見交換の機会を提供しています。さらに、この「CASTL」が、個々人の教員を対象としているのに対し、大学を対象とした「CASTL キャンパスプログラム」というのがあります。「CASTL キャンパスプログラム」は、カーネギー財団の委託を受けて、「American Association for Higher Education」(「アメリカ高等教育学会」)が運営しており、現在200以上の大学が参加しています。これらの大学は、互いに情報交換をしながら、各キャンパスにおいてFDや報償制度などを通して「Scholarship of Teaching and Learning」を支援している。「CASTL キャンパスプログラム」のようなトップダウン的なアプローチと「CASTL」のボトムアップ的なアプローチが生み出す相乗効果が期待されているのですが、さらに素晴らしいのは、「CASTL」が特定分野の学部や教員だけを対象

にしていない、という点です。様々な専門分野の教員たちが参加しており、例えば、化学、哲学、心理学を専門とする教員たちが、それぞれ教えている科目内容が違うにもかかわらず、互いの教授法や教えに関する知識・問題点に関する意見を交換し、学び合い、互いに励まし合っている。実際に、このような場面を目の当たりにして、私たちはこのような試みの意義を再確認させられるわけです。

カーネギー財団の知識メディア研究所では、これら「Scholarship of Teaching and Learning」を推進する試みを、テクノロジーによって支援しています。例えば、現在アメリカ国内でも注目を集めつつある KML オンラインギャラリー (<http://www.carnegiefoundation.org/KML>) では、CASTL フェローの教員たちが知識メディア研究所のスタッフと共に作り上げた「Scholarship of Teaching and Learning」に関する電子ポートフォリオ (Electronic Portfolio) を閲覧することができます。これらの電子ポートフォリオは、過去4年程の間に、私たちが20人余りのCASTL フェローの有志と共に、彼らの「Scholarship of Teaching and Learning」をマルチメディア、デジタルビデオ、インターネットなどを利用して公開しよう、という試みの成果の一部です。「教えに関する知識や経験」を公開する、と一口に言っても様々な方法があります。例えば、先に紹介したMITの「Open CourseWare」プロジェクトは、その一つです。このような形で、例えば13週間のオンライン講義の教材を全て公開するというのは、素晴らしいことなのですが、問題もあります。13週間分のオンライン教材というのは莫大な量になるのですが、それが全て公開されても、例えば、他の教員たちが、これらの教材の全容を把握し、どのように使うのが効果的なのかを理解するのは、多大な努力と時間がかかる。それは、「教材をインターネットで公開する」というのは、技術的には非常に簡単にできることではあるけれども、互いの「教え」を理解し学び合うという点では効率的ではない。そこで私たちが勧めたいのは、このような形でオンライン教材を公開するのに加えて、「Scholarship of Teaching and Learning」に関する電子ポートフォリオを作成し、同時に公開するというやり方です。ある教員が、自分の教えに関する様々な問題点、自分が試みたこと、自分が学んだことなどを、マルチメディアや電子ポートフォリオを利用して、

知的に凝縮し表現する。私たちがよく言うのは、「15分間で、自分の教えの一番重要な部分を理解してもらうにはどうすればよいか」ということです。

一例を挙げると、カリフォルニアの「Foothill College」というコミュニティー・カレッジの音楽の教授、カリフォルニア大学バークレー校で学ばれた非常に優秀な方で CASTL フェローの一人ですが、彼女は、自分の「音楽概論」の授業を改良するプロジェクトに5年間を費やしました。プロジェクトを開始した5年前には、この授業は、少人数のセミナー形式で行われており、受講しているのは、全くやる気がなく、半分程しか授業に出てこない数人の学生。しかも、彼らがこの講義を取っているのは、どうやら、寝ていても単位がとれるから、というような理由らしい。このような消極的な学生たちに、彼女は、何も考えずに、ベートーベンやバッハなどの、西洋音楽の古典をベースとした伝統的な音楽概論の授業をしていた。このような状況では、自分も学生たちも全くやる気がでない、何とかこれを改善したい、という願いから、彼女の授業改造プロジェクトは始まりました。結果からいうと、彼女は5年後に、この「音楽概論」授業を、オンライン講義を併用して、400人の学生に同時に教えるという大成功を収めました。この400人というのは、大学側がそれ以上増やすなということで、実は受けたいという学生は一学期に500人以上いるらしいという話さえ聞きました。これは、単に伝統的なセミナー形式のクラスを、オンラインに移行させたから成功したという訳ではなくて、この教授が、様々な試行錯誤を通じて、自分の授業を学生にとって意義のある興味深いものに生まれ変わらせようと、地道に努力し続けた結果です。彼女の電子ポートフォリオからは、様々なことが「15分間」で学べます。まず、このプロジェクトが、誰によって、何処で、どのように行われたか。また、5年間の試みを通して集められた、「履修した学生数の変化」「学生の業績評価」「学生の教師評価」などの色々なデータやプロジェクト報告の要約なども電子ポートフォリオの中に収められています。さらに、「研究テーマ」というセクションでは、この教授が授業を改善する上で、4つの研究テーマが取り上げられており、例えば、その一つの「多文化的な教材内容」では、「既存の伝統的な西洋音楽概論・理論が中心だった授業内容を、現代のアメリカにふさわしい、多文化的な内容に変えていく」という課題が扱われています。現代の

アメリカでは、多様な音楽文化が融合されているのですから、伝統的なクラシック音楽だけではなく、様々なジャンルの音楽を講義内容に積極的に取り入れていけば、学生も興味を示してくれるはずだ、と彼女は考えた訳です。そして、このテーマの観点からみて、「当初不人気だった授業や教材はどういうものであったか」「それがどのように分析され、改善されたか」が簡潔に説明されています。この電子ポートフォリオをみた教員の中には、「これは大変参考になったので、コメントを残したい」「自分の授業の中でも似たような問題があるので、その経験を分かち合いたい」と望む人たちもおり、電子ポートフォリオ内には、誰でも書き込みができる簡単な電子掲示板も用意されています。

このような形で電子ポートフォリオを利用することで、教員同士が互いに啓発され、各々抱えている教授法や教材に関する様々な悩み、問題や成功例などを公開する動きが活発になることが望まれる訳ですが、これはそう簡単なことではありません。例えば、これらの電子ポートフォリオをアメリカの高等教育や教育テクノロジー関連の学会などで紹介すると、ポジティブな反応と共に、「それぞれの電子ポートフォリオの作成に、どれくらいの手間と時間がかかったのか」という質問をよく受けます。実は、電子ポートフォリオの作成には通常、大変な手間暇がかかる。例えば、先程紹介した電子ポートフォリオの作成には、4ヶ月ほどかかりました。これは、インターネットのウェブサイトを作るのが大変だということではありません。ウェブサイトを作るのはむしろ簡単なのですが、この場合、5年間に渡ったプロジェクトに関するデータ、教材などの資料 --ダンボール箱3つ、4つ分もあるのですが-- そういうものを取捨選択し、試みの全容と成果を誰にでも解りやすい形に簡潔にまとめる、このような「知的な作業」の部分に非常に時間がかかります。収集されるデータや資料の量は膨大です。このプロジェクトのに関するレポート、講義のシラバス、学生が提出したレポートや課題などのサンプル、学生の評価データなど、実に多岐に及んでいます。これらの膨大なデータや資料を、如何に選択し、吟味し、整理し、さらに非常にわかりやすい形でまとめる。マルチメディアを使うからには、視覚的な訴求力も必要だし、さらに知的にも非常に洗練されたものでなければならない。そういう質の高い電子ポートフォリオにこそ同僚にみてもらう価値があるのです。

マルチメディアやインターネットのようなテクノロジーが利用できるようになって、
「膨大な情報」を「高純度な知識」に精練するためには、知的な努力が必要になる。もし
この努力を怠れば、個々の教員が持っている教育に関する膨大な知識や経験は埋もれてし
まい、分かち合うことも理解し合うこともできなくなる。さらに、これらの知識や経験の
蓄積も行われない。私たちが力を入れて取り組んでいる仕事の一つに、このような問題を
解決するためのテクノロジー、「Scholarship of Teaching and Learning Support Tools」
と呼ばれていますが、の研究開発があります。今日はあまり時間もありませんので、これ
については詳しくお話しできませんが、例えばこういうテクノロジーを普及させ、ひとり
でも多くの教員が、「教えに関する経験や知識」を公開・共有できるようになるのが、私た
ちの夢とも言えます。アメリカでは、約 80%の大学でオンライン教育、オンライン講義が
行われており、既に多くのものがオンライン上に存在します。教材もオンライン上にあれ
ば、教員や学生のやり取りもオンライン上にある。それらを、知的なツールを使ってを使っ
て、吟味し、選び出し、再構築してわかりやすい形で提示できるか。例えば、今お見せし
ているのは、一般には非公開の、CASTL フェローたちが使っているオンライン・コラボ
レーション・システムです。過去 4 年間で、200 人以上の大学教員や学校の先生たちに使
われてきました。このシステムの中には、各教員それぞれのオンライン・ワークスペース
があり、彼らのプロジェクトに関する資料や情報を同僚と共有することができます。例え
ば、この方は、Portland State 大学でコミュニケーションを教えている先生ですが、彼女
のワークスペースでは、CASTL フェローとしての 1 年間の試みの中で、集められ、まと
められた様々なデータやレポートなどを閲覧することができます。各教員のプロジェク
トが進むにつれ、膨大な資料やデータ、レポートが彼らのワークスペースに加えられてい
くのですが、問題は、これらを他人にみてもらう場合、読み手が、どの資料をどのように
読んで解釈すればいいかが難しいという点です。その結果、折角インターネットを通して、
自分の「教えに関する経験や知識」を公開しても、誰も見てくれない。非常に幻滅して、
継続する意欲を失ってしまう。そこで、誰もが簡単にこれらの資料やデータを整理し、イ
ンターネットベースの電子ポートフォリオに簡潔にまとめられるツールを開発し、このワ

ークスペースの中に組み込んでみました。そして、「Scholarship of Teaching and Learning」に意欲的に取り組んでいるが、この新しいツールを試しに使ってもらったのですが、ほとんどの教員は、一週間もかからずに、既存の自分の資料やデータ、レポートなどをまとめて、電子ポートフォリオを作りあげることができました。例えば、先ほど紹介したコミュニケーション学科の教員は、これまで電子ポートフォリオを作ったことはなかったのですが、このツールを使って、一週間で二つも電子ポートフォリオを作ってしまった。そのうちの一つは、自分のクラスの4人の学生のプレゼンテーションを収めたデジタルビデオが収められていて、さらにそれぞれに対するコメントが加えられている。他のCASTL フェローたちも、このツールを使うことによって、自分の教授法や講義を改善していく過程をドキュメントして共有することに拍車がかかるようになった。このような試みや体験を、これまでもアメリカの学会やカンファレンスなどで度々話してきましたが、各大学や教員、アドミニストレーターたちから、「自分たちも是非同様の試みをしたいので、是非このツールを使いたい」という問い合わせを頻繁に受けます。私たちとしては、これらの要望に応えるために、来年中には、このツールを Opensource 化し一般に公開したいと考えています。

大変心強いのは、「Scholarship of Teaching and Learning」を推進するためのプロジェクトを進めているのは、カーネギー財団だけではないということです。たとえば、政治家を多く輩出している Georgetown University という私立の名門大学が中心となって進めている「Visible Knowledge Project」は、いくつかの大学が集まって、「教えに関する知識や経験」を視覚化し共有しようという試みです。現在、人文、社会科学分野を中心に70人ほどの教員が参加して、CASTL と似たような形でプロジェクトが進められています。私たちが開発した電子ポートフォリオ制作ツールは、このプロジェクトでも使われています。また、Vanderbilt 大学の「Faculty Innovative Profile Project」でも、いくつかの大学が協力し 大学の教員の Innovative な講義をドキュメントし、公開することで互いに学び合うという試みが行われています。知名度の高い名門大学でも、やはり教員の質を上げたいという問題は常に抱えているわけですが、ライバル校とですら協力し、お互いの教員

たちが知的な共有を行うことで、最終的には教育機関として互いの利益に繋がる、という考え方は、実にアメリカ的といえますが、このように、幾つかの大学を拠点にして、「Scholarship of Teaching and Learning」のネットワークが広がっていくのは、素晴らしいことです。最初にお話した「OCW」「MERLOT」「OKI」などの Opensource プロジェクトでも、「Scholarship of Teaching and Learning」は、中心的な概念の一つとして重視されています。

最後に、一つ興味深い話をしたいのですが、たとえば MIT の OCW プロジェクト、先に説明しましたように、オンラインの教材をインターネット上に全部公開するというプロジェクトですが、実は、それほど寛大ではないプロジェクトとも言えます。というのも、MIT は、オンラインの教材を一般に公開し、共有するのは構わないが、「これらの教材を MIT の優秀な教授陣と学生たちがどのように使って、どのような成果をあげているか」という部分については、これは自分たちの知的財産の中心的部分なので公開したくない。この話を聞くと、OCW プロジェクトで公開された MIT の教材に飛びついている人たちは、がっかりするんですね。「なんだ、どうせならそこまで見せてくださいよ」と。にも関わらず素晴らしいのは、「Scholarship of Teaching and Learning」という考え方を取り入れれば、「MIT の教授陣や学生たちが、これらの教材をどのように使っているか」、が公開されていなくても、世界中の何千もの大学や多くの教員たちが、この MIT の自由化された教材をどのように使ったかという経験、それに関わる教授的知識、教材の改善に関する意見を公開することはできる、という点です。世界規模で高騰教育の知的コミュニティーを形成することが可能な時代が、まさに始まろうとしています。

今日お話してきたようなアメリカにおける試みは、世界をも巻き込もうとしています。このような中で、日本の高等教育界が、今後このような趨勢にどのように対応していくのか、何を考えていかなければならないのか、を考えていくことが重要だと思います。私個人的な考えもあるのですが、時間もなくなりましたので、この後、活発なディスカッションを通して意見交換ができれば幸いです。

【喜多村】

すばらしいプレゼンテーションをたいへんありがとうございました。

お話しをうかがっていて、アメリカの高等教育、アメリカのプラズマティズム、実存主義、あるいはオープン主義は、「これはすごいな」と思いました。こういう相手に、日本の高等教育は太刀打ちできるのか。私も現在、高等教育の現場にいて、大学の中で、どのような大学のプレステージが高いかというところ、一般的には、研究志向の強い大学がプレステージが高いというし、財源も研究志向が高いところに行くようになっています。teachingでいくら頑張っても、それを受け入れたり、促進するインセンティブはないのかな、と思っていました。そのような状況から比べますと、アメリカのこういう試みというのは、単にテクノロジーが使えるというのではなくて、それをどうやって簡単に皆に普及できるようにするかという観点から、開発が行われているし、思い切って全世界に教育内容を全部公開する。先ほど飯吉先生は、「MITは最後の企業秘密は明らかにしない」と言いましたが、逆に何千何万の大学が、その経験を基に、とくにteachingをどのように改善するかということについて体験を積み重ねていくということによって、逆に企業秘密に迫っていくという点などは、そのような意味で非常に示唆に富むものでした。